熊本大学教育学部紀要
第67号, 127－132, 2018

大学生における Sexting 経験の実態調査

高　岸　幸　弘

A survey on sexting experience among Japanese university students

Yukihiro Takagishi

（Received September 28, 2018）

Online troubles caused by sexting, which refers to sending sexual messages and images via the internet, has recently been one of the serious problems in the environment surrounding the internet. Psychological study of sexting has only just begun and so it is necessary to understand the reality of the situation in Japan. This study involved a survey about sexting experience among 382 Japanese university students. The result showed that only 11（3%）students knew the term “sexting.” One hundred fifty two（39.8%）students have experienced sexting. The students who intentionally performed sexting were 33（8.6%）although it includes only passive sexting experience of receiving data. Nineteen（5%）students sent sexting data. The results indicated that the knowledge of the term “sexting” was not common among Japanese youth and that knowledge of the psychological mechanism underlying sexting is needed to understand the related risks.

Key words : sexting, university student, Social Networking Service（SNS）

Ⅰ．問題

SNS とは Social Networking Service の略で，その名称にソーシャルネットワークという言葉が含まれているように，そこには人と人とのつながりが発生するコミュニティである．コミュニティで人と人とが交流すれば貴重な出会いや豊かな経験が期待されると同時に，必然的にネガティブで傷ついてしまうような経験や，逸脱・犯罪行為も生じうる．SNS での交流も同様であり，そこにはさまざまな事件や犯罪行為が発生することもある．インターネットを介した SNS ならではの対人交流の特徴の一つは，直接面と向かって言語・非言語的に交流せずに情報をやり取りするところにある．その特性ゆえ，共通の趣味をもった複数の人と遠く離れていてもすぐに知り合うことができたり，友人の友人などと親しくなったりと，これまでにはなかなか成立しなかった人間関係ができる点は魅力・利点の一つである．その一方で，同じ場にはいないという状態でコミュニケーションを図るため，直接面と向かって行うコミュニケーションでは惹起しにくかった欲求やストレス体験も生じ，それが犯罪行為となることもあるため，近年では大きな問題となっている．その問題の一つが性的な画像や情報の SNS 上への投稿である．

サイバースペースへ性的な画像を投稿する心理の研究はまさに近年始まったばかりである．この問題に先駆的に取り組んできたのは欧米諸国であり，性的なメッセージや画像をインターネットで送信することを意味する sexting という用語が一般にも定着している．この sexting とは sex（性）と text（メールを打つ）の二つの語からできた言葉である．2000 年半ばに登場したものとされており，Oxford English Dictionary にも 2011 年に新語として加えられている．日本でも「セクスティング」という言葉でこの現象を説明している資料などもあるが（渡辺，2011），sexting 行為そのものを認識していても，まだその行為が特定の名称をもち，広く議論されているとは言えない状況にある．日本での sexting の問題を検討する際には，その現状についての把握が不可欠であるといえよう．

アメリカの 18 歳から 24 歳までの若年成人では 68% の者が SNS に性的な画像を投稿したことがあるという調査結果もある（Dir et al., 2015）．ただ，性的な画像といってもたいていは，セクシーなポーズをとった写真や，性的に挑発的な写真といったものである．つまり，性的なパーツそのままの露出をしていないいわゆる“セクシーな画像”であり，たいていは服を着ているものを指している．下着姿や水着，半裸の画像の送信の場合もふくまれるが，1 ～ 3% 程度である（van Oosten & Vandenbosch, 2017）．そもそも SNS

サイトの運営者は露骨な性的露出を禁止しているため，欧米諸国であってもそれほど多くはならないようになっているのである．それでも極めて少数ではあるものの，自分の性的なパーツを露出させた性的な画像を投稿する者もいる．この性的画像の投稿は成人よりも思春期の子に多いことからも，より深刻な問題となる（van Oosten & Vandenbosch, 2017）．

この性的な画像を投稿する行動特性は“セクシーな画像”を公開することからエスカレートした状態という考え方も指摘されており，この点について van Oosten ら（2017）はオランダで 13 歳から 25 歳までを対象に調査研究を行っている．対象者は青年期（13 ～ 17 歳）の 953 名と成人期前期（18 ～ 25 歳）の 899 名に分けて比較検討された．その結果，自分のセクシーな画像を SNS 上に投稿すればするほど，はじめは性器を露出していないセクシーなだけのものであっても，徐々にエスカレートし，性器など性的なパーツが露出した画像を投稿する意欲の増大が確認された．ただしこれは青年期の女子のみに当てはまることであった．また，たとえセクシーな画像を送信した経験があったとしても，その画像が自分を写したものではなく他人を被写体としたものであれば，その後エスカレートして性的な画像を投稿しようとする意欲に影響することはなかった．つまり自分が被写体となった画像を投稿したときのみこの現象は認められたのである．

そもそも SNS に性的な画像を公開するときに，その人はどのような期待をしているのだろうか．性的な画像をネット上に公開するときの期待について Dir らが，18 歳から 25 歳までの青年と若年成人を対象にした一連の調査研究の結果を報告している（Dir et al., 2015; Dir et al., 2013a; Dir et al., 2013b）．Dir ら（2015）によると，彼らが SNS に性的画像を公開することで期待したり予測したりしている主要なものは次の 3 つであるという．一つはセックスパートナーを見つけられるだろうという期待，二つ目は性的画像を公開することで幸福感や自尊心の向上といったよい気持ちになれるだろうという期待，三つめは，自己嫌悪や恥を感じさせるなどのネガティブな結果の予測である．この一連の調査結果からは，SNS 上に性的画像を公開することでセックスパートナーとつながる可能性は示唆されたものの，彼らが期待するほど多くはなかった．それよりもパーソナリティ特性の「計画性のなさ」の方が，性的な行為の達成につながる影響は大きかった（Dir et al., 2013b）．性的画像を公開する際に，ポジティブな期待だけでなくネガティブな結果となる予測も少なからず持ちうることが示されたことは重要である．Dir ら（2013a）はポジティブ・ネガティブな期待・予測にはどのような事がらからなるか，また，それらが性的画像を公開することに関連しているかを調べている．278 名の大学生を対象としたこの調査では，性的画像に関する期待・予測は，送信するとき，受信するとき，それぞれにポジティブ期待・予測とネガティブ期待・予測 2 つの要素があることがあきらかとなった．以下にそれぞれの代表的な項目を挙げる．

期待と予測	項目例
送信のポジティブ期待・予測	性的画像を送ることは興奮する
送信のネガティブ期待・予測	性的画像を送ることは自尊心を低下させる
受信のポジティブ期待・予測	性的画像を受信するとセックスをしたくなる
受信のネガティブ期待・予測	性的画像を受信すると腹が立つ

性的画像を送ることのポジティブ期待・予測は性的画像の送信行為を増大させていたが，性的画像を送ることのネガティブ期待・予測は性的画像の送信行為を減少させていた．この結果から推察されることは，性的画像を送ることの防止には，その行為のポジティブな期待を減少させ，ネガティブな予測を増大させるような介入が望まれるといえよう．

また，この研究では，研究の主要なねらいではなかったものの，同性愛の人とバイセクシュアルの人では，そうでない人よりもネットを介した写真のやりとりが多いことを見出している（Dir et al., 2013a）．これは SNS をこのような性志向性をもった人たちのコミュニティとして活用しようとしている面も推察されるため，本研究とはまた別の機会に今後検討していく必要があると考える．

以上の一連の研究の中で Dir らは Sexting Behaviors Scale（SBS; Dir et al., 2013）と Sextpectations Measure（Dir et al., 2013）という心理測定尺度を開発している．それぞれ，性的画像をネット上に公開する行動の程度と頻度を 11 項目で測定する尺度と，36 項目からなる性的画像を公開することで期待することがらを測定する尺度である．日本では SNS への性的画像の公開は，問題として認識されているが，その研究方法から議論していなければならない段階であることを踏まえると，SBS のような先駆的な心理測定尺度を取り入れていくことは重要であると思われる．本稿では SBS を試験的に邦訳し，日本人大学生の sexting 体験の実態把握を試みる．

sexting の問題点は公然わいせつや児童ポルノ規制法の違反になる可能性だけではない．このような場合，SNS 上に性的画像を公開することは加害行為として

位置づけられるものの，その行為が被害を招くことも少なくない．Marret & Choo（2017）は，15 歳と 16 歳の少年 1487 人を対象に調査を行い，SNS を含むインターネット上での被害体験を調べた．その結果，対象者の 92% が何らかの SNS を利用しており，そのうち 52.2% が過去 1 年間の間にオンラインでの被害を経験していた．望まない性的な勧誘の経験については男女差がなかったものの，被害体験は男子の方が女子よりも有意に多かった．また，男子 646 名のうち，35 名（5.3%）がオンライン上で相手の望まない性的な勧誘を行っていた．つまり加害行為をしていた．オンライン上で加害行為をしようとしていたこれらの少年は，オンライン上で個人情報を開示した少年よりも被害を受ける確率が 6 倍もあることが示された．つまり，SNS の利用は被害を受けるリスクと無縁でいられないことは当然であったとしても，この研究結果からは，個人情報を知られることよりも，加害行為を試みることが被害を受けるリスクにつながるというわけである．これは加害者の治療教育の際には重要な情報となろう．これと同様の見解は Choi & Lee（2017）も述べている．彼らはインターットでの被害・加害の体験はどちらも体験することが多いと報告している．それゆえ，SNS に性的な画像を投稿する行為に対しては適切な介入が必要になるといえる．

以上を踏まえ，本研究では Dir ら（2013）の SBS を試験的に邦訳し，日本の大学生の sexting の実態を明らかにすることを目的とする. その際, インターネットや SNS の利用状況との関連を検証するために, SNS の主たる利用端末としてのスマートフォンの使用状況についても調査を行う．

Ⅱ．方法

1．対象

質問紙調査を，東海地区の国立大学，九州地区の国立大学，関西地区の私立大学に通う大学生を対象に行った．質問紙の表紙に，無記名調査であること，参加・不参加の判断は自由であること，不参加の場合も何ら不利益が生じることはないことが記載された．回答内容は統計的に処理されるため，個人が特定されることはないこともあわせて記載された．その上で調査参加に同意が得られた学生に回答を求めた. それぞれ, 86 名（男性 27 名，女性 59 名，平均年齢 21.5），233 名（男性 101 名，女性 132 名，平均年齢 20.9），65 名（男性 32 名，女性 32 名，平均年齢 20.0）の合計 384 名から回答が得られた．青年期の大学生を対象とした調査であるため，30 代と 40 代の回答者それぞれ 1 名を分析から除外し, 18 歳から 25 歳までの計 382 名（男性 160 名，女性 222 名，平均年齢 20.8）を分析の対象とした．

2．質問項目

年齢と性別の人口統計学的変数のほか，スマートフォンおよび SNS の使用状況について尋ねた．また，インターネット上のトラブルの体験については，家庭裁判所で調査官がインターネットに関連した問題の調査を行う際に使用するチェックリストを参考に 11 項目の質問を，ある・ないの 2 件法で尋ねた（Table 5）. sexting という用語の認知度を調べるため，この用語と用語の意味するところを知っているかどうかも尋ねた．

そして，Sexting Behaviors Scale（SBS; Dir et al., 2013）を試験的に邦訳し実施した．SBS は 11 項目からなる尺度で，それぞれ，1（全くしない）から 5（頻繁にする）までの 5 件法で回答する．第 10 項目は，サイバースペースでの性的なメッセージや画像のやり取りをした相手の人数を記入してもらう形式になっている. 第 11 項目はインターネットを介して性的なメッセージや画像をやり取りする相手について 1（しない），2（私が魅力を感じている友達とである），3（かなり仲のいい人とである），4（彼氏や彼女など付き合っている人とである）の 4 件法で回答する．

Ⅲ．結果

1．使用している通信機器および SNS サービス

使用している通信機器，スマートフォンを使い始めた時期，使用している SNS サービス，アカウント数，裏アカウント保有の有無，SNS で知り合い SNS 上でのみ付き合いがある友人の数について，表および図で示した．

Table 1　使用している通信機器

使用している機器	使用している人（%）
スマートフォン	378（99.0）
タブレット	49（12.8）
携帯ゲーム機 携帯音楽プレーヤー	71（18.6）
パソコン	268（70.2）
携帯電話（ガラケー）	14（3.7）

Table 2　スマートフォンを使い始めた時期

時期	人数（%）
小学校から	6（1.6）
中学校から	73（19.1）
高校から	243（63.6）
大学から	60（15.7）

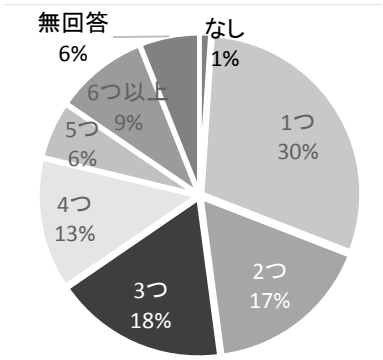

Figure 1　保有しているアカウント数

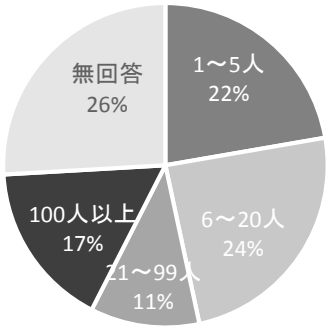

Figure 2　SNS で知り合い SNS 上でのみ付き合いがある友人の数

Table 3　使用している SNS サービス

SNS サービス	使用している人（%）
Facebook	109（28.5）
LINE	379（99.2）
Instagram	264（69.1）
Twitter	317（83.0）
ブログ	5（1.3）
その他	14（3.7）

Table 4　裏アカウントの保有の有無

あり（%）	なし（%）
115（30.1）	245（64.1）

2. インターネット上でのトラブル経験

スマートフォンやパソコンなどで生じたンターネット上でのトラブル経験は Table 5 の通りである.

3. sexting という言葉の認知

sexting という言葉を知っていると答えた者は 11 名（3%）で，知らないと回答した者は 371 名（97%）であった．なお,「sexting とはどのような行為か知っているか」という質問に対しては，sexting という言葉を知っている人は全員「はい」と回答していたため，回答者の割合は sexting という言葉を知っているか，という質問と同じになっていた.

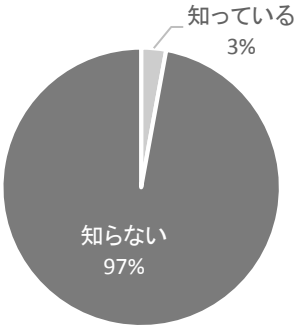

Figure 3　sexting という言葉を知っているか

4. Sexting Behaviors Scale（SBS）

SBS の質問項目のすべてに「1：まったくない」で回答していたものを sexting 経験なし，どれか一つでも「2：まれにする」から「5：頻繁にする」に回答していたものを sexting 経験ありとして集計すると，あり 152 名（39.8%），なし 229（59.9%）であった．ただし，SBS では一方的に性的なメッセージや画像が送られてきた経験のみがある回答者と，sexting を自分の意志で行った回答者が混在している可能性があるため，送信する行為の有無と，これまでに性的なメッセージや画像のやり取りをしたことのある相手の人数について集計した．その結果，項目 8「あなたはどのくらいの頻度で性的なことをほのめかしたり刺激したりするような画像やメッセージをインターネット（Facebook や Twitter その他 SNS，メールなど）で送信しますか」という質問に対し，「1：まったくない」とそれ以外の回答の割合を集計すると，あり 19 名（5%），なし 362 名（94.8%）であった．また，項目 10「あなたが性的なことをほのめかしたり刺激したりするようなメッセージや画像をやり取りしたことのある相手は何人ですか」に対し, 0 人が 349 名（91.4%），1 人以上が 33 名（8.6%）であった．さらに，誰もが閲覧可能なサイトに性的なメッセージや画像を投稿するかという質問（項目 9）に対し，すると回答した者は 5 名（1.3%）であった.

また，sexting をする可能性のある潜在的な相手を尋ねる質問である項目 11「基本的に，私がインターネットでの性的なメッセージや画像をやりとりするのは―」に対し,「1:しない」は 333 名（87.2%）で,「2:私が魅力を感じている友達とである」,「3：かなり仲のいい人とである」,「4：（彼氏や彼女など）付き合っている人とである」と回答したのは合計 46 名（12.0%）であった.

Table 5　インターネット上でのトラブル経験

トラブルの内容	ある（%）
チェーンメールや迷惑メールが送られてきたこと	308（80.6）
心当たりのない利用料金の請求を受けたこと	158（41.4）
出会い系・アダルトサイトなどで被害に遭った（遭いかけた）こと	33（8.6）
個人情報や写真などを無断で流されたり，悪用されたりしたこと	27（7.1）
インターネットの掲示板やメールで悪口を書かれたこと	24（6.3）
他人からしつこくメールを送られたり，つきまとわれたりしたこと	34（8.9）
インターネットにのめりこみ，勉強に集中ができなかったり，睡眠不足になったりしたこと	203（53.1）
インターネットで知り合った人と実際に会ったこと	67（17.5）
インターネットの掲示板やメールで他人の悪口を書いたこと	22（5.8）
スマホ（携帯）のカメラで店の本や雑誌の一部を無断で写真に撮ったこと	46（12.0）
他人のメールアドレスや写真などを無断で流したこと	29（7.6）

Ⅳ．考察

本研究では，大学生を対象に sexting 経験についてその実態を把握するための調査を行った．その結果，SBS で明らかにされた，sexting の経験がある人は 39.8% であることが示された．しかしながら，SBS の項目では，例えば商業的な目的のメールなど，本人の意識とは無関係に性的なメッセージや画像を送られた経験があるのみの人もこの中に含まれてしまう. 事実，インターネット上でのトラブル体験で最も多かったのは「チェーンメールや迷惑メールが送られてきた」の 80.6% である．そこで，自らの意志で送信した者と，性的なメッセージや画像のやり取りをした相手の人数から導かれる割合を算出した結果，それぞれ 5% と 8.6% であった．Dir ら（2015）のアメリカの調査結果の 68% と比べると，sexting を受動的に経験していただけの者を含めても約半分であり，さらに積極的な行為としては，それよりもずいぶんと低い割合と言える．そして，誰もが閲覧可能な場所への性的メッセージや画像の投稿を行った経験のある者は 1.3% と急激に減少する．このことから，日本では性に対する表現が以前よりもオープンで自由になってきたとはいえ，欧米諸国と比べるとまだ抑制されている（抑制できているとも言うべきだろうか）状況だといえる．ただ，性に関することを始め，質問紙による調査では，ありのままの回答がしにくいテーマもある．そのような場合いわゆる「社会的望ましさ」（Crowne & Marlowe, 1960）が作用し，本当の実態が把握できないこともある．この点については，インターネットでの調査などより回答しやすい環境設定が望ましいといえるだろう．少なくとも本調査では，それでも 4 割近い大学生がこの問題にかかわっているということが明らかにされたのであり，そこから生じうるトラブルの可能性は一定量あることが推察されるため，sexting による問題の啓発は重要であるといえる．

sexting とそれから生じる問題の啓発に重要となってくるのが，sexting という用語そのものの浸透である．本研究の結果，筆者の予想に大きく反して，この言葉を知っている者は 3% であった．もちろん sexting という用語を知らなくとも，インターネット活用のリテラシーや安全管理がなされていれば問題はない．しかしながら，SNS での問題を知ることと用語を知ることは対になって理解されることが多いことを踏まえると，この結果は危惧されるものだと言える．例えばセクシャルハラスメントは，セクシャルハラスメントという用語が理解されることで，この言葉が普及する以前から存在していた，幅広いハラスメント行為を指摘しやすくさせた．同様に，sexting がどのような行為を指しそしてどのようなリスクを抱えた行為であるかを知っていくこと, 知らせていくことは重要である．

青年期にあたる大学生の実態は，それ以前の発達段階の経験を踏まえて生じていることを踏まえると，青年期以前の子どもの sexting の状況も懸念される．これは自分が法律に反する行為を行う側に立つということだけでなく，子どもをターゲットに SNS を用いて加害行為を行った性犯罪者の数が少なくないことからも指摘できることである．Mitchell ら（2010）の 2500 以上の司法機関を対象に実施された調査の結果では，アメリカでは未成年に対して何らかの SNS を活用した性犯罪を行ったことで拘束されているものが，2,322 名いると推定され，そのうち 503 名は SNS を使って被害児を特定しねらいを定めて犯行に及んでいたことが分かっている．相当な数の性犯罪者が SNS を使って未成年者に接近し，性犯罪を行ってきたわけである．決して子どもというだけで SNS の使

用がリスクになるというわけではないがオンラインネットワークの活用に際して必要となる危機意識や危機管理は重要となろう．Mitchell らは，性犯罪被害の予防のためのメッセージは，SNS などそれらの性犯罪が生じるオンライン上にのみ向けて行うのではなく，青年の実生活の中で SNS 利用をしているか否かにかかわらず，オンライン上で性的な画像交換や個人情報の開示をしないことなどを伝えていくことが重要だと述べている．日本でもインターネットのリスクに関する情報提供は，オンライン，日常生活両面で実施されているが，オンラインのそれは，情報の信憑性が高い者から低いものまであることを踏まえると，人から人へ直接伝える情報教育がより良い形式であろう．また，インターネット特有の危険性の理解やセキュリティの管理といったインターネットリテラシーを充分身につけるまでは，子どもをとりまくインターネット環境を管理監督することが必要ではなかろうか. 事実，個人で自由に使えるインターネット環境があることや，保護者がインターネット利用に関するルール設定をしないことで，SNS への性的画像の投稿を含む，インターネット上での性的な活動が増大することも報告されている（Doornwaard et al., 2014; Doornwaard et al., 2015）．インターネットの利便性とリスクは日々生み出されている．情報化に遅れをとらない教育が望まれる．

引用文献

Choi, K. S., & Lee, J. R.（2017）. Theoretical analysis of cyber-interpersonal violence victimization and offending using cyber-routine activities theory. Computers in Human Behavior, 73, 394-402.

Crowne, D. P., & Marlowe, D.（1960）. A new scale of social desirability independent of psychopathology. Journal of consulting psychology, 24（4）, 349-354.

Dir, A. L., & Cyders, M. A.（2015）. Risks, risk factors, and outcomes associated with phone and internet sexting among university students in the United States. *Archives of sexual behavior, 44*（6）, 1675-1684.

Dir, A. L., Coskunpinar, A., Steiner, J. L., & Cyders, M. A.（2013a）. Understanding differences in sexting behaviors across gender, relationship status, and sexual identity, and the role of expectances in sexting. Cyberpsychology, Behavior, and Social Networking, 16, 568-574.

Dir, A. L., cyders, M. A., & Coskunpinar, A.（2013b）. From the bar to the bed via mobile phone: A first test of the role of problematic alcohol use, sexting, and impulsivity-related traits in sexual hookups. Computers in Human Behavior, 29, 1664-1670.

Doornwaard, S. M., Ter Bogt, T. F., Reitz, E., & Van Den Eijnden, R. J.（2015）. Sex-related online behaviors, perceived peer norms and adolescents' experience with sexual behavior: testing an integrative model. PloS one, 10（6）, e0127787.

Doornwaard, S. M., Bickham, D. S., Rich, M., Vanwesenbeeck, I., van den Eijnden, R. J., & Ter Bogt, T. F.（2014）. Sex-related online behaviors and adolescents' body and sexual self-perceptions. Pediatrics, 134（6）, 1103-1110.

Marret, M. J., & Choo, W. Y.（2017）. Factors associated with online victimisation among Malaysian adolescents who use social networking sites: a cross-sectional study. BMJ open, 7（6）, e014959.

Mitchell, K. J., Finkelhor, D., Jones, L. M., & Wolak, J.（2010）. Use of social networking sites in online sex crimes against minors: an examination of national incidence and means of utilization. Journal of Adolescent Health, 47（2）, 183-190.

van Oosten, J. M. F., & Vandenbosch, L.（2017）. Sexy online self-presentation on social network sites and the willingness to engage in sexting: A comparison of gender and age. *Journal of adolescence, 54*, 42-50.

渡辺真由子.（2011）. ネット上の性情報に対する規制とメディア・リテラシー教育のあり方の国際比較. メディア・コミュニケーション, 61, 59-73.